View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

ドキュメンタリー制作と社会デザイン
—映像制作授業の成果と課題—
Producing Documentaries for Social Design

宮本　聖二
MIYAMOTO Seiji

［要旨］
立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科の 2016 年度前期授業で、社会デザインのために映像コンテンツを制作する授業を担当した。この研究科として初めての授業である。様々な大学のメディア系の学部などでは実習として番組制作を行う授業はこれまでも行われている。しかし、この授業は、映像コンテンツ制作を社会課題の発見と問題点の所在を分かりやすく可視化するための「手段」として活用することに重点を置いたものだ。前期の 14 コマの授業を通して、映像制作の基礎を講義で身につけ、その後学生がテーマを探して企画を立てる、さらに取材、撮影、編集などの作業を経て映像コンテンツを制作して行った。果たして、これらの一連の作業と学びを社会デザインに結びつけていくことができたのか、実際のコンテンツの制作過程を学生の言葉とともに振り返り、授業の成果と今後の課題について考察する。

1. はじめに

筆者は、およそ 30 年にわたってテレビ局で報道番組やドキュメンタリー制作に取り組み、社会のさまざまな課題をニュースや番組にして放送してきた。また、新聞記者やテレビ局の若手ディレクターの番組制作研修プログラムの開発と講師をつとめて来た。その経験から、社会課題を多くの人に伝えるには映像コンテンツにして可視化することが有効な手段であることを確信している。また、作り手（学生）にとっては、取材や撮影の過程で課題の所在と全体像、あるいはディテールをつかみ取ることができるし、編集を行い、ナレーション原稿を作成することで、取材・撮影で集めた素材を整理してまとめ、自らが伝えたいことに優先順位を付けていく力を身につけることになる。学生とともにこの授業を進めていくことで何が得られたのか、あるいは何が課題だったのかをいくつかのコンテンツの制作過程で振り返る。

2.「ドキュメンタリーと社会デザイン」授業の進め方

授業では、まず映像コンテンツ制作の基本的な手法を身につける。手本となる番組を視聴しながら撮影、編集、ナレーション原稿作成の基礎を講義した。撮影ならば、企画テーマにそったアングルやカットをどう撮れば良いのか、編集では見る人の理解を進めるためにカットをどのような順番でつないで行くのか、インタビューを全体のどの部分に入れれば伝わりやすいのかなどを解説した。こうした基礎を 4 コマ行ったところで実際に制作してみたいテーマを全員が考えることにした。授業内で、全員が自分の企画を説明して議論した。議論を重ねた末、どの企画を実際に制作するかを決めていった。一人が一本制作するのではなくチームを編成することにした。筆者のこれまでの体験から、映像コンテンツは共同作業によって制作することが、より良いものにしていくためには欠かせない。制作の過程で議論を重ねることで、ときに独りよがりになっていくことを防ぎ、取材や撮影、編集の過程で修正していくことが単独で行うよりも容易になるからだ。議論の結果、13 人の履修生が 2 人から 3 人で一つの班を作り、班ごとに制作することとした。

家庭用のビデオカメラ、もしくはスマートフォンで撮影し、編集は PC で行う、ナレーションも PC の編集機の機能を使うこととし、6 分以内という条件を設定した。

議論の結果急増する中国人留学生をとりまく問題、高齢者の交通事故の増加と免許の返納、首都圏の郊外団地の高齢化とその活性化の取り組み、谷根千の魅力を発信する夫婦の活動など計 6 本の映像作品を作ることになった。

この中から、3 本の映像コンテンツを例にその制作過程を振り返り、コンテンツ制作がどのように社会デザインに結びついて行ったのかを見て行く。

3. 実践研究

(1) 高齢者による交通事故増加と免許返納

50 代の女性、齊藤さんは大学院入学前の半年間、新聞社主催の「映像による情報発信の講座」を受講、そこで制作した作品が高く評価された。齊藤さんは、「映像を通しての発信というものに興味がなお一層増したためこの授業を受けることにしました。」と話した。彼女が今回テーマにしたのは「高齢者が引き起こす交通事故とその解決策としての免許返納の推進」だった。自分の友人関係のなかで高校生の娘を高齢者の運転ミスによる交通事故で亡くした人がいることがきっかけだった。

齊藤さんとチームを組んだのは、メディア関連の学部を卒業して入学してきた鈴木さん。「大学では論理的なアプローチが主で、実践はゼミ以外の授業ではなかったので、もう少しアクティブなことをしてみたいと思っていました。」とこの授業に取り組んだ理由を語る。

この齊藤さんと鈴木さんのチームは、まず娘を亡くした母親のインタビューを自宅に訪問して撮影することからスタートした。ここには、亡くなった高校生の同級生と教員も来てくれた。彼らは、事故をきっかけに高齢者の免許返納を実効性のあるもの

にするための署名活動などを進めている。齊藤さんたちは、娘を亡くした母親を出発点に社会的な運動にフォーカスしたいと企画意図を説明した。ところが、授業内の議論では、このテーマに対してはもうひとつの視点を持つべきではないか、という意見が出た。なぜ高齢者が運転をするのかという見方である。特に公共交通機関が行き届かない地域などでは、高齢者が移動の自由を確保するには自らハンドルを握らなくてはならない、運転を続けたいと言う欲求がある。そのことと免許返納推進とどうバランスを取るのか、そこを描くことが「社会デザイン」として必要だと言う意見が出たのだ。そこで、齊藤さんたちは、今も家族や自分のために運転を続けている 87 歳の男性を取材することにした。鈴木さんの祖父である。また、現在の警察や自治体の施策も織り込むことにした。免許返納をした高齢者への特典など優遇制度などである。こうしたすでに行われている制度や取り組み、データはインターネットで収集し、画像として取り込むことになった。

ところで、齊藤さんと鈴木さんの作品作りの大きなポイントは、インタビューの実現にあった。ここは、慣れていない人にはなかなかハードルの高い撮影である。つらい思いをしていると明らかに分かっている人に、まさにそのつらいことを聞かなくてはならないからだ。とはいえ、テレビの番組、特にドキュメンタリーや企画ニュースの出発点は、誰か個人の悲しみや怒りに共感し、寄り添うことから始まることが少なくない。その当事者の声を届けることでダイレクトにメッセージが届く。齊藤さんは、その女性とは直接の知り合いではなかったのだが、つらい状況にあることを理解しながらも積極的にアプローチしてインタビューを実現した。この作品は、このインタビューができたことによって伝える力をより強く持ったと言える。一方、鈴木さんは「想像していたよりも被害者の方からお話を伺うことが重かった。精神面で、自分がまだまだ弱いことがよくわかった。どのように質問したら失礼ではないかとか、気を遣ってしまいました。」と取材時のつらい思いを語ってくれた。ここは、映像コンテンツを制作することの難しさ、あるいは肝心なところでもある。取材する相手とカメラをまわさせてもらうまで関係を取り結び、さらにときには聞きづらいと思える質問を投げかけるのだ。ここまで実現して初めて見る人に届くものとなる。二人にとっては、この体験をするだけでも得るものは多かったと思う。

さらに、鈴木さんは今も運転を続ける高齢者として自身の祖父を取材対象としてインタビューを行った。鈴木さんの祖父は、家族の送り迎えをするために、あるいは自分の通院などのために 87 歳になった今も運転を続けている。家族に負担をかけたくない、あるいは家族のために役立っていると言う生き甲斐もそこにある。鈴木さんは、祖父が運転している姿を助手席から撮り、その後自宅でインタビューを収録した。鈴木さんは、「祖父にインタビューを依頼するのも正直勇気がいりました。内容が「高齢者の運転についてどう思うか」ということで、当事者として、また、客観的に考えてもらって、という形に結果的になりましたが、祖父に「あなたは加害者の代表なんだよと自分が示しているような気がしました。」と家族であるがゆえの難しさを語る。

以下が、齊藤さんたちが制作したコンテンツの流れである。

まず、事故の概要から入り（**写真 1**）、亡くなったのが高校生であることを伝え、

写真 1

写真 2

写真 3

写真 4

データとして交通事故全体で高齢者が引き起こす事故が相対的に増えていることを提示。その後母親や同級生のインタビュー（**写真 2**）で、免許返納の必要性に言及して、鈴木さんの祖父のシーンで高齢者にとって運転することの意義、行政の施策を紹介することで、免許返納を進める上で運転できなくなった高齢者の移動の自由を何らかの代替手段で確保すべきであることを提言して終わった（**写真 3**、**写真 4**）。

子を亡くした母親の言葉が見る人の心をつかみ、鈴木さんの祖父のインタビューで免許返納と相対する状況があることを知らせる。いわば共生のありようをさぐる、課題も解決策の提言も明確なコンテンツになった。

授業を終えて、齊藤さんは「制作者の私達は、中立の立場を取っており、ビデオを見た方にそれぞれ考えてほしいという願いを込めたものとなっています。が、もっと、私たち制作する側の主義・主張を入れた作品作りにした方が良かったのか、作品を作り終わった今もまだ自問自答している状況です。」と語り、バランスを取るということよりも「免許返納をもっと進めるべきだという」問題提起に軸足をおいたものにすべきだったのではないかと齊藤さんは話した。作り手が自らの主張をコンテンツに織り込むことも大切だが、筆者としては、課題や議論の所在を明確にすることが社会デザインの出発点としては優先すべき大切なことだと感じている。ここは議論の分かれるところかもしれない。

(2) 高齢化を“先取り”した団地― 活性化策はあるのか―

長年、記者として活躍した堀内さんは、埼玉県の郊外の団地を舞台に高齢化の問題を取り上げた。高度経済成長期に団塊の世代を中心に入居した「武里団地」である。同じく社会人の神田さんとチームを組んだ。1960 年代には、2 万 2 千人もいたこの団地の住民は現在では半分以下にまで減少し、65 歳以上のお年寄りが 44％を占めるまでになった。これは、20 年後の日本全体の様相を先取りしている状況といえる。堀内さんは、そこに着目して、この団地で何が問題でその解決のために人々が何をしているのかをテーマに企画を立てた。

建設から 50 年経過した団地は、若い世代が去り高齢化が進み、活力に欠け、時に孤独死も起こる、さらに、エレベーターがないなどでお年寄りにとっての利便性も低い。そうした問題を抱えるなかでこの団地（UR）では、地元自治体と連携しその対策に乗り出している。団地内の自治会が「ふれあい喫茶」というイベントを定期的に行い、集会所に住民が集まって交流できるようにしている。さらに、地域にある大学に働きかけて、地方出身の学生に格安で団地に入居してもらうという試みを始めている。堀内さんたちは、まず高齢者が多い状況を撮影し、「高齢化の進んだ地域」を映像化（**写真 5**）。その対策として行われる「ふれあい喫茶」を取材・撮影し、そこで高齢化の進んでいることの何が問題かを当事者たちにインタビューを行った（**写真 6**）。さらに、団地に暮らす大学生たちが団地の地域で交流する様子を紹介した（**写真 7**）。

限られた取材期間のなかで撮影できるものは限定されるが、これらのシーンで構成して、先行するかたちで高齢化しているコミュニティの問題とそのなかで対策に取り組む人々を描くことができた。

堀内さんは、もともとこの授業で制作するテーマのひとつに高齢化の問題を挙げていた。この団地を取材することにしたのはインターネットでの検索の結果であった。立ち上がりの取材としては今やネットは有効である。大切なことはその後で、堀内さんは現地に足を運び、実態を確認しながら同時にそこで何が行われているのかを把握し、あるいは当事者に

写真 5

写真 6

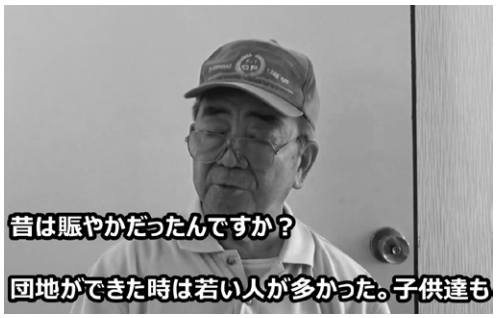

写真 7

話を聞くことで具体的な撮影すべき事象を確認したのだ。取材体験の豊富な堀内さんだからできたことでもある。

堀内さんは、授業後こう語る。

「武里団地を選んだのは、学生を住まわせて地域の活性化を図ることに行政が関与している点がユニークだったのと、自宅から近くて取材が容易だったためです。こちらは、電話やネットによるラフな事前取材の段階で、映像のイメージが自然とわいてきました。あくまでも、「ドキュメンタリーと社会デザイン」という 14 コマの授業の題材として適当かどうかという観点で考えたということです。」

しかし、堀内さんは、「ビデオの撮影も編集も全く初めての経験だったので、全てに苦労しました。」編集や音声の調整に負担があったことを語る。この点においてはチームとして組んだ神田さんが編集の部分をカバーしてインタビュー音声の不明瞭な部分は字幕を入れることで映像作品として理解しやすいものになった。チームで制作するのは、作業を分担してカバーし合えると言う利点もある。

(3) 留学生が直面する問題～中国人学生の作品～

この授業には中国からの留学生が 4 人参加した。二人ずつ 2 チームに分かれて作品を制作することになった。そして、いずれのチームも、自らが大学院に至るまでに乗り越えてきたこと、あるいは同じ留学生の立場の友人が直面した問題を取り上げた。オウさん（二人とも苗字はオウ）のチームは、留学生にとって日本人に精神的に支えられることが必要であることをテーマにした。

もうひとつの、リウさんとホウさんのチームは、中国からやってきた留学生がどういったことを乗り越えて専門学校や大学に進学するのかをテーマにした。企画者のリウさんは、このテーマにしたことを「今は日本へ留学している中国人が多くて、日本にすごく影響を与えています。ただ、中国の留学生の具体的な状況は誰も知らないと思っています。留学生はすべてお金持ちじゃなくて、人生の大切な体験として考えている人が多いのです。」と話した。

日本には、20 万 8 千人もの留学生がいて、そのうちの 45％の 9 万 4 千人が中国から来ている（独立行政法人日本学生支援機構調査、2015 年 5 月）。経済成長著しいと言われる中国だが、オウさんやリウさんは、日本に来る学生の多くは、経済的に恵まれている訳ではなく、アルバイトをしながらなんとか進学し学んでいると言う。それだけに、日本においてさまざまな面で支えてくれる人が必要なのだと言う。

リウさんたちのチームは、日本語学校で学ぶ 18 歳の陳さんを取材したもの。中国人留学生はまず日本に来ると日本語学校に入学する。そこで日本語を学び、JASSO（日本学生支援機構）の「日本留学試験（EJU）」を受けることになる。この試験は、日本の高校生にとってのいわばセンター試験のようなもので、この試験での成績が進学先を決める大きな目安となる。その際は、日本語学校において進路指導を受けるのだが、どの大学のどの学部に進学するのかなど日本語学校がかなり大きな影響力を持つ（**写真 8**）。こうしたことは当の留学生か、関係者以外の日本人にはほとんどなじみがない。リウさんたちは、日本語学校での進路指導の様子や深夜のアルバイトで生活費や授業料をまかなおうとする姿を通して中国からの留学生の大学へ進むまでの前半を描いた

写真 8

写真 9

写真 10

写真 11

（**写真 9**）。

オウさんたちのチームは、大学進学後の留学生を映像化した。中国からの留学生が増えてきて、さまざまな事情で中途で帰国する学生が出てきている。その中には、異国での厳しい生活環境に耐えきれなくなったと言うケースも少なくないという。オウさんたちは、留学生が勉学を続けるには様々なサポートが必要だと言う問題意識を持ち、特に留学生にとって、精神的に支えてもらえる日本人の存在と頼れる「場」があることが重要だと言うことを訴えたかったという。主人公は法政大学に通う全さん。彼女がアルバイトで働く台東区鶯谷の小さな洋食屋を舞台に撮影した（**写真 10**）。この店の経営者が全さんを家族の一員のように扱い、親身になって面倒を見てくれる様子を描いた（**写真 11**）。この映像コンテンツを見ることで、こういった場やサポートしてくれる日本人がいるかどうかが、経済的にも将来にも不安を感じて日々を送る留学生の大きな支えになることがわかる。

リウさんたち、オウさんたちの２つの番組を通してみることで、留学生（特に中国からの）たちが、来日してからの辿る道を知ることができ、受け入れた側としてなにができるのか、どのように手を差し伸べるべきなのかを感じ取ることができた。

授業では、「身近なことから課題を見つめ、社会デザインを考える」コンテンツを作ろうと呼びかけたが、オウさんやリウさんたち留学生のチームは、まさに自らが直面した、あるいは直面している問題を留学生全体のこととして普遍化することができたといえる。

4. まとめ

(1) 授業の成果―社会デザインに結びつけられたのか―

この授業を通して、学生が身の回りにある課題を見つけてその問題のどこに注目すべきなのかを映像コンテンツで伝えることがいくつかの作品でできたと考えている。特に高齢者の交通事故と免許返納をテーマにしたコンテンツでは、高齢者にとっては免許を保持して運転を続けることで行動の自由を享受していることを伝え、返納と運転を続けることの欲求というギャップを警察や自治体などが免許に代わる特典などで埋めようと言う取り組みを始めていることを知らせることができた。最後のコマの試写と批評では、自動運転の技術開発も将来のこの問題の解決に資するのではないか、という意見も出て、コンテンツにはない別の側面からも解決策を提示できるのではないかとの意見も出た。映像コンテンツは、見た人が課題の存在を知った上でそこから新たに考え始めるきっかけにもなりうる。

中国人の留学生のコンテンツでは、私たち日本人の多くにはこれまで窺い知ることのなかった進路選択の実態や留学生には日本人による精神的な支えや中国人コミュニティや学校以外の居場所いわばサードプレイスが必要だということを表現していた。日本の人口が縮小して行くと同時にグローバル化が進む中、将来は近隣の国々の人と国内で仕事を共にすることは避けられない。それだけに、中国人の留学生が日本で学んで能力を高め、スキルを身につけていくことをサポートすることは日本人の問題でもあるとして共有することにつながったと言える。

今回の授業を通して、それぞれのチームが自分たちで課題を見つけ出して可視化するとことに十分成果があったといえる。次はその課題解決にまで発展させることを実現したい。

(2) 学生が授業で獲得したもの

リウさんは授業を通して以下のような感想を寄せた。「色々なことが勉強できました。例えば、主人公とのインタビューは重要だと思っています。どんな質問をするとか、主人公の言葉をどう整理するとか。自分の研究について調査方法もインタビューを主に考えていますが、取材対象とのインタビューが重要な体験になったと思っています。」と、今後の大学院での学びや研究の参考になったとしている。

齊藤さんとともに「高齢者の交通事故と免許返納」に取り組んだ鈴木さんは、「人からの話の聞きかたをもっと学びたいと思いました。たった6分という動画制作ですが、社会課題を捉えることから始まり、それをどのように構成に収めるかを考えるのは、本当に難しかったです。思いとか形のない漠然としたものを形にするということを授業で学びました。どう伝えるか、切り口はたくさんあり、どう工夫するかもたくさんあり、100人いれば100通りの動画ができあがると思いました。想像力が大切なのではないでしょうか。」と話し、インタビューの難しさを体感し、社会課題を取り上げるコンテンツにしても作り手の思いによってさまざまな形を取ることを感じ取ったようだ。

映像コンテンツを作ることの大きな利点は、課題や問題の渦中にいる当事者の方々

と強く関わると言うことである。話を聞かせてもらい、カメラを向けさせてもらえるだけの人間関係を作らなければならないからだ。取材や調査の協力をしていただく方と誠実に向き合って、信頼してもらうということである。この体験は今後の研究のためにも大切な経験になるはずだ。

(3) 浮かび上がった課題

今回は、上述したように家庭用のビデオカメラと PC での編集、ナレーションも PC の編集ソフトを使うことにしたが、この技術を習得するのに思ったより手間と時間がかかり、ほとんどの学生は授業外にも取り組まざるを得なかった。作品がすべて完成したのは最後の授業の目前で、なんとかすべての作品を全員で視聴して批評しあうことができたが、かなりぎりぎりのスケジュールとなり、特に仕事を持つ社会人の学生には負担は大きかった。映像コンテンツ制作の基礎の習得と実際の制作実習のバランスをどう取るかが課題である。「社会デザイン」ということに重点をおくなら、取材や調査にもっと時間を割いてほしいと言う学生の意見もあった。武里団地をテーマにした堀内さんは、「テーマの絞り込みに時間がかかり、最後は時間に追いまくられた感じがします。結局、自分がやりたいテーマを選んだ人は取材がうまくいかず、身近で手堅い題材を選んだチームが作品を“完成”させることができたような気がします。社会人の受講生が大部分を占めて夜間の授業というのは、大きなハンディだと思いました。」と課題を指摘した。

(4) 授業の進め方の改善

今回は、夜間の 90 分の授業内だけではどうしても取材や撮影、編集は完結しなかった。撮影は、休日などに都内あるいは首都圏近郊で撮影を行ったが、筆者はなるべく同行するようにした。撮影後の制作も、ざっと編集した後試写とやり直しを繰り返すので 90 分では収まらず、補講を行った。このあたりのやり方にはさらに工夫が必要で、時間的な余裕のある学生とそうでない学生でも映像作品制作ができる手法を考えなければならない。例えば、社会デザイン研究所で行っている「ドキュメンタリー研究会」の撮影済みの素材を活用し構成や編集だけを行い作品に仕上げるというやりかたも含めて、さまざまな状況の中で履修する学生に応えて行きたい。

なお、齊藤さんと鈴木さんのチームが制作した「高齢者による交通事故と免許返納」のコンテンツは、齊藤さんが「毎日女性会議（女性による社会への発信）」に出品、そこで「チャレンジ賞」というアワードを受賞することができた。被害者の家族のインタビューを実現したことなどが評価された。この授業で制作される作品については、今後も番組や映像コンテンツのコンクールなどに出品し、社会的にどのように受け止められるのかを知る機会を得つつ、広く見られる場を確保したい。